

東京都内湾水生生物調査

地点名	St.6	調査年月日	平成28年5月26日 11:28 ~ 12:09
-----	------	-------	--------------------------

<調査地点>

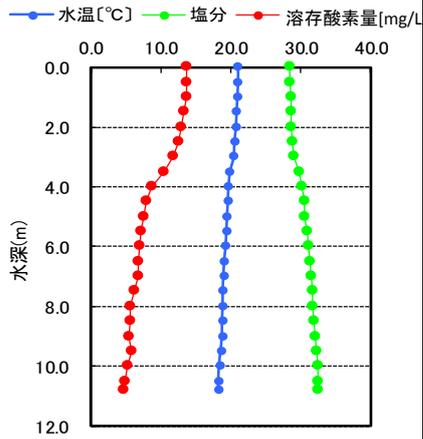


<底質状況、底生生物出現状況>



東京港フェリーターミナルの正面で採泥。航路であるため、水深は11.8mと深い。海底付近の酸素量は、4.6mg/Lであり、無酸素状態ではなかった。

底質の性状は、シルトであった。海底面は、酸素があるため、表面の泥は灰色であったが、泥の中には酸素が少ないため、黒色(還元状態)であった。



臭気は、弱い硫化物臭(卵の腐った臭い)が感じられた。

フルイに残った試料。マガキやムラサキガイの死殻、貝殻片が多くみられた。



マルバガニ

甲幅は3.5cm程度になる。一般的に、水深30~100mの砂泥底にすむ。甲には、一對の濃紫色の斑点をもつ。



オウギゴカイ

体長20cm以上になる大型のゴカイ類。東京湾の泥底~砂泥底では、貧酸素状態の期間を除き、普通にみられる。



シマメノウフネガイ

北アメリカ原産の外来種。殻長は5cmを超える。他の貝類の殻上に付着して生活する。内湾から外洋の広い範囲に分布する。



コロモガイ(死殻)



カガミガイ(死殻)



マガキ(死殻)

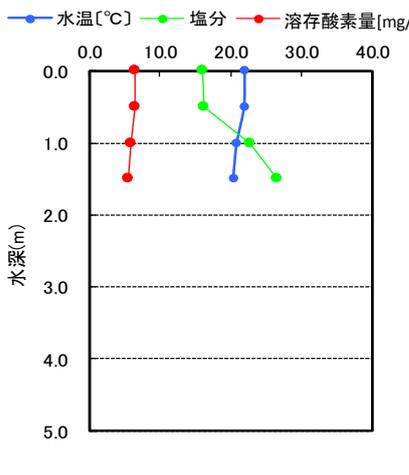
調査地点の海底は泥底であったが、砂泥底に生息するコロモガイやカガミガイ、護岸に付着するマガキやムラサキガイの死殻が確認された。現在、これらの貝類は調査地点付近には生息しないことから、かつて生息していたか、周辺から潮流等で運ばれたものと推定される。

平成28年度 東京都内湾水生生物調査 5月底生生物調査 速報

東京都内湾水生生物調査

地点名	三枚洲(荒川河口)	調査年月日	平成28年5月26日	10:08 ~ 10:55
-----	-----------	-------	------------	---------------

<調査地点>



<底質状況、底生生物出現状況>



荒川と旧江戸川の河口に残された天然の浅場。調査時の水深は2.5mあり、大潮の干潮時でも干出しない。すぐ横は、東京ディズニーリゾートである。



底質は細砂で、柔らかい泥(シルト・粘土分)はほとんどみられない。水深が浅く、海底の表面が固いので、採泥作業は一苦労である。



フルイに残った試料。砂のほとんどはフルイの目合(1mm)を抜けてしまい、貝殻片が少量残る程度。



水気を切ると、公園の砂場の砂に近い。



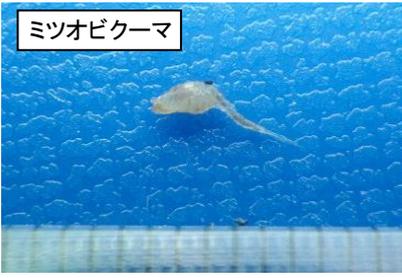
多毛類
目につく大型底生生物として、多毛類が数種類確認された。



カノコキセワタ科
貝殻は小さく、軟体部に内在するナメクジ状の巻貝。砂泥底上をはい回る。巻貝類やウミウシ類を丸のみにして食べる種類もある。



ニホンイサザアミ
汽水域に生息するアミの仲間(エビの仲間でない)である。体長10mm程の透き通った体を持つ。魚類などの餌として重要である。



ミソオビクーマ
体長6mm程度になる。生時の体は、半透明である。干潟や河口域で普通にみられるクーマ類(小型の甲殻類)である。

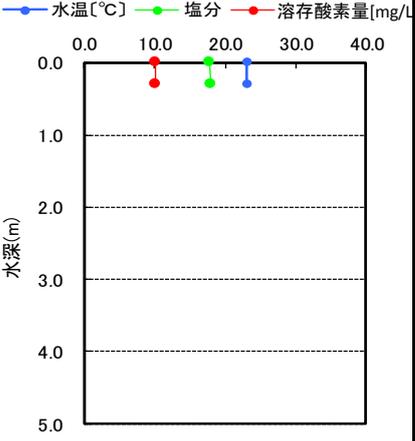


ドロクダムシ属
体長7mm程度になるヨコエビの仲間。ドロクダムシ類は種類が多く、内湾などにも多く出現する。

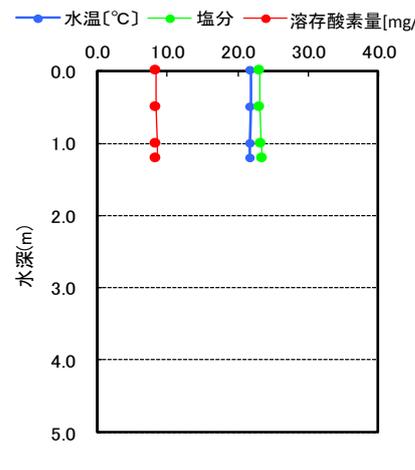


アサリ(死殻)
チヨノハナガイ(死殻)
シオフキガイ(死殻)
現地では、目につく大きさの二枚貝は確認されなかったが、アサリ、シオフキガイ、チヨノハナガイなどの死殻が確認された。

東京都内湾水生生物調査

地点名	St.31(多摩川河口)	調査年月日	平成28年5月25日	12:28 ~ 13:19
<p><調査地点></p> 		<p><底質状況、底生生物出現状況></p>  <p>多摩川河口から1.5km付近の浅場であり、干潮時には川の中に立ち込むことができる。調査時の水深は80cmであった。</p> <p>底質はシルト混じりの細砂で、臭いはない。</p>		
		 <p>フルイに残った試料。砂のほとんどはフルイの目合(1mm)を抜けてしまい、貝殻片が少量残る程度。</p>		
<p>マテガイ科</p>  <p>殻は細長い筒状で、内湾の干潟の砂質の多い場所に生息する。東京湾には、マテガイ、エゾマテガイなどが生息する。</p>		<p>アサリ</p>  <p>殻長4cm程度になる。潮干狩りなどで盛んに獲られている代表的な二枚貝。東京湾のものは形が細くて、模様コントラストが強いものが多い。稚貝も多く採取された。</p>		
<p>チヨノハナガイ</p>  <p>殻長1.5cm程度になる。殻は白色で半透明、同心円状の肋がある。内湾奥の泥底にも生息し、貧酸素水域でも、酸素がある期間に短期的に発生することが知られている。</p>		<p>アラムシロガイ</p>  <p>殻高1.5cm程度になる。殻の表面には粗い粒状突起が並ぶ。干潟から水深3mの砂泥底に分布する。魚や貝の死骸に集まり、『海の掃除屋』といわれる。</p>		
<p>トリウミアカイソモドキ</p>  <p>甲幅は8mm程度になる。砂泥質の干潟でアナジャコ類が作った巣穴を利用して生活していると考えられている。東京湾周辺では内湾部でみられることは少ない。</p>		<p>エドハゼ</p>  <p>全長5cm程度になる。湾奥の干潟域に生息し、アナジャコの巣穴がある砂泥地を好む傾向がある。アナジャコの巣穴を隠れ家として利用している。小型甲殻類を食べる。</p>		
<p>ラスバンマメガニ</p>  <p>甲幅は7mm程度になる。内湾泥底域や護岸壁などのゴカイ類の棲管の中に生息すると考えられている。</p>				

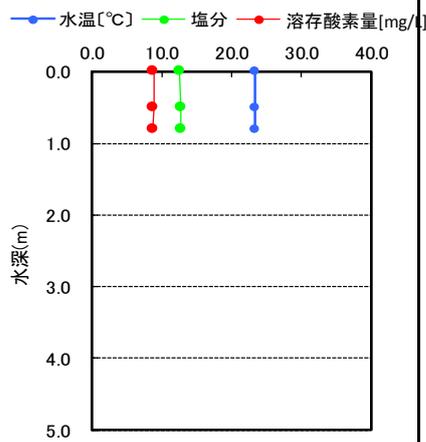
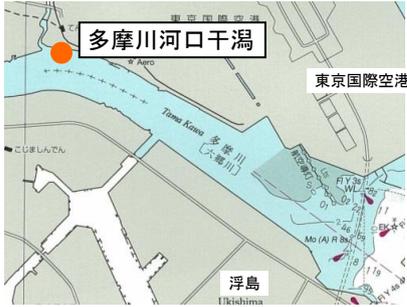
東京都内湾水生生物調査

地点名	森ヶ崎の鼻	調査年月日	平成28年5月25日 13:50 ~ 14:55
<p><調査地点></p> 		<p><底質状況、底生生物出現状況></p>  <p>羽田空港の北側に残された天然の干潟。森ヶ崎水再生センターが隣接する。歩いて入ることはできない。</p> <p>春の大潮の干潮時には広大な干潟が出現する。</p>	
		 <p>採取地点の底質は細砂であり、柔らかい泥は含まれていない。</p>  <p>フルイに残った試料。貝殻片や植物片などが混じっていた。</p>	
<p>アサリ</p>  <p>潮干狩りなどで盛んに獲られている二枚貝。稚貝が採取されたが、大型の個体は採取されなかった。</p>		<p>ヤマトシジミ</p>  <p>殻長4cm程度になる。河口干潟など淡水の影響の強い、砂底から泥底に生息する。日本産シジミ類で最も普通に食用されているシジミである。</p>	
<p>紐形動物門</p>  <p>ひも状の生き物で、ゴカイ類の様な毛は持たない。掘り返して採集すると、細かくちぎれることが多い。肉食性である。</p>		<p>ハマグリ(死殻)</p>  <p>現在東京湾で見られるハマグリ</p> <p>森ヶ崎の鼻では古いハマグリ(死殻)が多くみられた。東京湾の在来のもものは后背縁が非常に長い。</p>	
<p>ホンビノスガイ</p>  <p>殻長6m程度の比較的大型の個体が採取された(殻長は10cmを超える)。北米原産の外来種で、東京湾の湾奥の泥底やカキ礁周辺では多く見られる。食用となる。</p>		<p>ヤマトシジミ</p>  <p>調査地点周辺では、大型のヤマトシジミが多くみられた。船でしか渡れない場所であるためと考えられる。</p>	

東京都内湾水生生物調査

地点名	多摩川河口干潟	調査年月日	平成28年5月25日	10:55 ~ 12:17
-----	---------	-------	------------	---------------

<調査地点>



<底質状況、底生生物出現状況>



多摩川左岸側(東京都側)の海老取川河口付近の干潟で調査を行った。



多摩川の左岸側には、右岸側(神奈川県側)のようなヨシ原はみられない。



底質はシルト(やわらかい泥)が混じった細砂であり、臭いはなかった。



フルイに残った試料。貝殻片が多く混じっていた。



多摩川河口干潟では、様々な大きさのヤマトシジミが採取された。稚貝の新規加入が起こっている様である。



殻長5cm程度になる。淡水の影響の強い干潟の砂底から砂泥底にやや深く潜って生活する。殻は白色半透明で、非常に薄く壊れやすい。



体長2cm程度になる。細長い円筒状の体をしている。砂~砂泥質干潟のごく表層部分に巣穴を掘って生息する。

<周辺の状況>



甲幅4cm程度になる。柔らかい水分の多い泥干潟に斜めの穴を掘って巣穴を作る。巣穴の入り口には放射状の浅い溝ができる。



甲幅1cm程度になる。岸寄りの砂地に巣穴を掘って生活している。餌をとった残りの砂を小さな砂団子に丸めて巣穴の周りに並べる(和名の由来になっている)。



干潟上の潮だまりや滞筋などでもみられる。アナジャコの巣穴を隠れ家として利用している。